

それも、つい昨晚の話だ。

なのに実際に来てみればいまの反応である。

ジブリルの言うことはもっともだった。

「ひと晩のうちになにかがあった……ということだな」

「問題は、なにがあったのかですよね」

「なにかの拍子にアーティファクトを使って、魅入られたところじゃないのか」

「……だとしたら、まずいですね」

洪面を浮かべて、ジブリルは腕を組む。

「まずいのは事実だが、やつは運がいい。手遅れになる前に俺たちが来たんだからな」

「もう手遅れってこともあるかもしれないですよ？」

「そうならないためにお前がいるんだろうが。働け魔術師」

睨みつけると、ジブリルはおかしくてたまらないように笑う。

「ヴォルフさん、あのおじさんのこと嫌いでしょ？ 嫌いなのに助けちゃうんですかあ？」

「悪党だろが善人だろが、俺は目の前でアーティファクトが人を破壊させるのが我慢ならないだけだ。お前がやらないなら俺が壊す。だけなら俺でもできるんだからな」

「……ま、そういうことにおきましようか。わたしも大切なアーティファクトを壊されるのは困るんで？」

ヴォルフの心を見透かすような笑みを浮かべると、ジブリルは頭の後ろで手を組む。

「で、これからどうします？　ベルリングさんは逃げ出しちゃいましたけど、別に出て行けとは言われてませんよね？」

「まあ、人を呼んで追い出されるのも時間の問題だろうがな。……というかジブリル、お前なら誰にも見つからずに屋敷の中を探せるんじゃないのか？」

「無理です。ヴォルフさんだって知ってるでしょう？　ものに触れないってことは扉も開けられないってことなんですから。ここに置いていかれたら、わたしは自力で脱出することもできないんですよ？」

「……そういえば、そうだったな」

鼻持ちならない相手とはいえ、軽率なことを言ってしまった。

自責の念から洪面を浮かべると、ジブリルはなんでもなさそうに頭を振る。

「それより、これからどうするかですね。交渉決裂っぽいですし、もう力尽すくで家捜しでもしちゃういます？」

「それは最後の手段だ。アレの在り処あもわからないんじゃないじゃ探している間に人を呼ばれる。現実的ではない」

「でも最終的にはやっちゃうんじゃないですかあ」

ジブリルはケラケラと笑い声を上げる。

「でもベルリングさんの態度を見た感じじゃ、悠長に交渉してる時間はなさそうですよ」

「確かに、な」

どうしたものか頭を悩ませて、ヴォルフはさっと指を立ててジブリルに黙るよう促す。そのまま扉の隣の壁へと身を寄せる。

廊下の向こうから足音が近づいてきているのだ。

「おや、もう人が駆けつけてきちゃいました？」

ヴォルフは厳しい表情で頷く。

——それも、友好的ではなさそうだ。

やがて応接室の扉がノックすらなく乱暴に開かれた。

そこで、さすがのヴォルフも顔を引きつらせる。

入ってきたのは屋敷のメイドだったが、その手にはなんと肉切り包丁ばらちようが握られていたのだ。

「え、ええっ？ ちょっとちょっと！」

さすがにジブリルも怯えた声を漏らして後退る。

「アギ……？」

だが、メイドにはジブリルの姿は見えていないようだ。ヴォルフも扉の陰に身を潜めているため、死角しごくになっている。

おかげで、ヴォルフは相手を観察することができた。

赤く充血した眼め。息は荒く、よほど興奮しているのか口の端からは涎よだれが垂れている。元はそれな

りに愛らしい娘だったのだろうか、とてもまともな状態には見えない。会話が通じるのかすら不安になるような様子だ。

—— なにかに操られている……のか？

応接室に標的を見つけられなかったことで、メイドも包丁を下ろして周囲を見渡す。

その後ろで、ヴォルフはそつと応接室の扉を閉めた。

「どうにも、よほど家主を怒らせてしまったらしいな」

呆れたような声に、メイドもヴォルフに気づく。

「がアッ！」

そして、問答無用で肉切り包丁を振り回してきた。

「ヴォルフさん！」

「加減はするさ」

目の前に迫る包丁を、ヴォルフは冷静に間合いを見切つて身を反らす。

重たい肉切り包丁が空振りして、体勢を崩したのはメイドの方だった。

ヴォルフはその後ろに回り込むと、首の根元を狙って軽く手刀を放つ。

「ゴッ?」

首を起点に激しく脳を揺さぶられ、メイドは敢えなく昏倒する——はず、だった。

「ヴォルフさん、まだ！」

「——ッ?」

メイドは何事もなかったように包丁を振るってきた。

——気絶させられない。操られているからか？

当て身とはいえ、何度も仕掛ければメイドを死なせてしまうかもしれない。気絶させられないのは厄介だった。

片足を後ろに引いて包丁の間合いから逃れると、ヴォルフは腰の刀に手をかける。

「とりあえず、その物騒なものを手放してもらおうか」

他人事ひとごとのように眩くと、メイドが振るう肉切り包丁に合わせて小刀を振るう。

スコンと軽い感触がして、メイドの手から包丁が消えた。

「アえ……？」

消えた包丁は、鈍い音を立てて天井に突き刺さっていた。だが、そこに持ち手はない。持ち手はメイドの手に残ったままだ。

ヴォルフは包丁を弾いたのではなく、刃だけ切断したのだった。

——力任せに弾くと、骨折させるかもしれないからな。

メイドは天井に刺さった包丁を啞然あぜんとして見上げる。

その隙すきに、ヴォルフは腕を捻ひねり上げて床に引き倒していた。

「女相手にあまり手荒な真似はしたくないんだが」

しかし気絶させられないなら拘束するしかない。

「ジブリル、どこかに縛れそうなものはないか？」

「えー？ 人様のお家でそういうプレイはちょっとどうかと——ヴォルフさん！」

軽口を叩たたこうとしたジブリルが悲鳴のような声を上げる。

それもそのはず、メイドは腕を捻り上げられたまま、背中にのしかかったヴォルフを力尽くで押し退けようとしていた。

「おいおい……。この力、本当に人間か？」

間違っても、ジブリルのように華奢な女の力ではない。

手を離さないと、メイドの腕が折れる。しかし拘束を解くとまた襲いかかってくるのだ。

「ヴォルフさん、そのまま押さえててくださいい！」

堪えきれずに呻き声をもらすと、ジブリルがメイドの正面に駆け寄ってきた。

そして、パンッと猫だましのよう両手を鳴らす。

「——ッっ！」

ビクンと身体を震わせ、メイドの身体から力が抜けた。

今度こそ、気を失ったようだ。

「……なにをした？」

「なんか変な魔力が絡みついているのが、視えぐ たんで、払ってみました」  
ぐったりとして動かなくなったメイドから、ヴォルフは手を離す。

「生きてます？」

「死んではいないが、目が覚めたら体中、痛みに苛さいなまれるだろうな」

当て身や取り押さえることでついた怪我はそれほどでもないだろうが、この細腕で重たい肉切り包丁を振り回し、長身のヴォルフを振り落とさんばかりの力を振るったのだ。筋線維ズタズタで数日は筋肉痛に悩まされることだろう。

どの道、しばらくは目を覚ましそうにない。

「これが『天使の揺り籠』の力か？」

「だと思えますよ。どういう理屈かはまだわからないですけど、なにかしらの方法で人間を操ることができるとも思います」

「操られているのは、こいつひとりだと思うか？」

「まさかあ、アーティファクトですよ？ 屋敷の住人はみんな手遅れだと思います」

恐らく、屋敷中の人間がこのメイドのように操られているということだ。

それでも、ヴォルフはホツとしたように胸をなで下ろすのだった。

——街ひとつでなかっただけ、運がいい。

アーティファクトとはそういうものなのだ。どんなささやか力に見えても、ひとたびたがが外れれば街ひとつ、国ひとつ、果ては世界そのものを呑み込まんと拡大していく。

あれに込められているのは、呪いなのだ。

だからヴォルフたちはアーティファクトを封印するために派遣されている。

そうしている間に、また慌ただしい足音が近づいてきた。

「ジブリル。いまのやつを一度に何人までかけられる？」

「ひとりずつじゃないと無理ですよ。ヴォルフさんがきちんと押さえつけるって条件つきで」

「なら、逃げるしかないな」

「へ？」

ヴォルフはジブリルを腰から抱え上げる。

誰の目にも映らず、触れることもできないジブリルだが、その姿を視認できるおかげかヴォルフだけは彼女にも生身の人間のように触れることができた。

そのまま応接室の扉を蹴破るように飛び出す。

ここにも数多くの調度品や絵画が飾られているが、どれもただの美術品のようだ。天井からは装飾の控えめなシャンデリアが等間隔にぶら下がっている。

しかし廊下の奥からは、ハンマーや斧おのなど物騒な得物を抱えた使用人が何人も押し寄せてきている。数も十人を下らないだろう。

「ちよつとヴォルフさんっ、お金お金！」

応接室には金貨の詰まった手鞆が残っている。

「ベルリングに支払うものだろう？ 放っておけ。どの道、アーティファクトは回収させてもらうんだ」

それにヴォルフの金でもない。美術館の金だ。そもそもこんな重たいものを帰りも持って帰るなごめん。

ヴォルフが駆け出すと、ジブリルが悲鳴を上げる。



「あうっ、ひうっ？ ヴォルフさん、もうちょっと優しく抱いてください！」

「なら自分で走れ」

「無理無理！ さすがに死んじゃいます！」

幽霊のようである、ジブリルは生きた人間だ。

自分からものに触れることはできないのに、無意識にぶつかってきたものは素通りしないのだという。つまり、銃などの流れ弾が当たれば怪我もするし最悪死ぬこともある。

あんな武器を振り回す暴徒の中に放り込まれれば、認識されずとも逃れられるものではない。

「というか、出口はこっじゃないですよ！」

「屋敷から出てどうするんだ。アーティファクトはここにあるんだろう？」

「出直すって選択肢はないんですか？」

「ない」

それに、使用人たちは出口を塞ぐようにして追いかけてきているのだ。向こうもヴォルフを逃がすつもりはないのだろう。

ヴォルフは胸元から拳銃を取り出す。

装弾数六発。回転式弾倉の最新型の銃だ。

一度足を止めて後ろに目を向けると、天井に狙いを定めた。

「ち、ちよっとヴォルフさん、どこ狙ってるんですか！」

「黙ってる。舌を噛むぞ」

ジブリルの抗議の声を無視してヴォルフは引き金を引いた。

パンツと軽い音が響いて、シャンデリアのひとつが廊下に落下する。けたたましい音を立てて、金属とガラスの破片が一面に散らばった。

直接、使用人の真上に落とすと死なせてしまうかもしれないが、これなら行く手を阻むことができる。

ジブリルも感心した声を漏らした。

「そうか、これなら足止めに……」

しかし、使用人たちはなんの躊躇もなくその上を駆け抜ける。

中にはガラスを踏み抜いた者もいたのだろう。血まみれになりながら、それでも走る速度をまったく落とさず追いかけてくる。

そんな悲惨な光景に、ジブリルも絶句する。

「うわ……」

「チッ、駄目か」

普通の人間は、ガラスの上を歩こうとは考えない。そうでなくとも、大きな音を立てればなにしろの反応を示すかと思っただが、逆効果だったようだ。

——どうする？

この様子では、殴り倒しても使用人たちは追い続けてくるだろう。そんなときだった。

廊下の先で、扉のひとつが開いた。

「こっちです！ 急いで」

顔を覗かせたのは少年だった。

——あれは、肖像画に描かれてた子供か？

ベルリングの息子だろう。扉に身を隠しながら手招きをしている。

「あの子、正気っぽくないです？」

「……迷っている余裕はない、か」

ヴォルフはその扉に飛び込んだ。

部屋に入ると、少年は慌てて扉を閉める。

直後、扉が激しく叩かれる。

鍵を閉めて箒をつつかえ棒にして固定するが、あまり長くは保たないだろう。

そんな扉を背中を押さえて、少年は振り返る。その視線は、ヴォルフの顔の傷に引き寄せられ、

次に腰の刀へと向けられた。

「その剣……剣侍のカタナ？」

少年の視線が刀に釘付けになっているのに気づいて、ヴォルフはそれを隠すように柄に手を載せた。

「ただの護身用具だ。気にするな」

「す、すみません。封印美術館の方というのは、あなたですよね？」

「ああそうだ」

ヴォルフが答えると少年の後ろで扉が大きく震える。

「僕はこの息子で、ロイといいます。お願いです、助けてください。この屋敷のみんなはもう、正気じゃないんです」

それは見ればわかることではあった。

ヴォルフはこっそりジブリルと視線を交わす。

（この息子さんなら、アーティファクトがどこにあるのかわかるかもしれませんね）

囁くジブリルにヴォルフが頷くと、ロイはこう続けた。

「こんなことになったのは、あの揺り籠のせいなんです。お願いです。あれを持っていってください  
い！」

「お前は、それがどこにあるのか知っているのか？」

「……っ、はい。こっちです！」

ロイは扉から離れると、窓を開けて外に飛び出す。

窓の下は庭園になっているようだ。手入れは行き届いていて、屋敷がこんな有様ありさまになってまだ時間間が経たっていないことがうかがえた。

「こっちです。早く」

ヴォルフはジブリルを床に下ろすと先に窓を跳び越えさせる。それから扉を警戒するようにして、自分も庭に下りた。

庭園に出ると、ロイは窓から見られないように身を屈め、屋敷の壁に沿うようにして走る。ヴォルフとジブリルもそれに倣ってあとに続いた。

やがて見えてきたのは、半ば地面に埋まるように設置された鋼鉄の扉だった。

数段の階段を下り、押し開けると、ひんやりとした空気とともにさらに階下へ通じる階段が姿を現す。そう長いものではない。十段もなくて傾斜もきついものだ。

恐らく、もとはワイン蔵かなにかとして造られたものなのだろう。

「ここは、地下室か？」

「はい。揺り籠はこの奥です」

ロイは忙しなく周囲を見回す。

耳を澄ませば屋敷の中から慌ただしい足音が聞こえる。まだ庭にまでは追いかけてきていないようだが、ここに来るのも時間の問題だろう。

——もう、時間もないか。

ジブリルと顔を見合わせると、彼女は頷いて先に地下へと下りていく。

(先に、中を調べてますね)

それを確かめて、ヴォルフも中に入ろうとした。

「ロイ！　そこでなにをしている！」

背中からかけられたのは、ベルリングの声だった。

「まずい、父上だ！」

ロイが慌てて扉を閉める。

それから、短い悲鳴が聞こえた。



「おい、ロイ！」

ヴォルフが踵きびすを返すと、ガチャンと鈍い音が響く。

地下室の扉というものは、基本的に外から施錠するものだ。鋼鉄の扉は、押そうが引こうがビクともしなかった。

「……やられたな。閉じ込められた」

悲鳴が聞こえたが、果たしてロイは無事だろうか。

——アーティファクトに呑まれた人間に、身内もなにも関係ないからな。

最初のメイドの様子を考えればわかることだが、息子といえど殺される可能性がある。巻き込んだというのとは違うだろうが、さすがに気にせずにはいられなかった。

とはいえ、ここで立ち尽くしても仕方がない。ヴォルフはひとまず扉あきらを諦め、階段を下って地下へ降りる。

やはりというか、こちらにも雑多な美術品が所狭しと積み上げられている。中には相応の価値がありそうなものも見受けられるが、扱いは杜撰ずさんなものだった。

ベルリングにとつて、ここにあるものも目的のものとは違ったのだろう。

だが、ロイはこの奥にアーティファクトがあると云ったのだ。

ヴォルフは慎重に階段を下りていく。

「——ヴォルフさん、来ちゃダメです！」

そこでジブリルが声を上げる。

なにごとかと身構えると、幽霊の少女の前には巨大な鳥籠が置かれていた。

——あれが『天使の揺り籠』か？

そして、その中に翼を持ったひとりの少女が踞すくまっていた。

真っ白な翼。鳥と同じ羽毛を持った翼だ。少女が身じろぎすると長い羽根がはらりと床に舞い落ちる。

「天使……？ 本物、か？」

ただ、その顔には見覚えがあるような気がした。

——肖像画の、娘……？

しかし、なぜ天使が同じ顔をしているのか。

その声で、天使もヴォルフに気づいたらしい。救いを求めるように口を開いた。

「耳を塞いで！ 声を聞いたらダメです！」

これまでになく切羽詰まったジブリルの声に、ヴォルフも反射的に耳を塞いだ。

甲高い、歌のような声が広がる。

——なんだ、これは……？

耳を塞いでいても鼓膜を揺さぶるような歌声。それを聴くと強烈な目眩がした。鳥籠に近かったジブリルの方は、立ってられないほどらしく膝から崩れ落ちてしまう。

やがて歌声が収まると、ヴォルフは転がり落ちるようにして階段を下った。

「おい、無事かジブリル？」

立ち上がれそうもないジブリルの肩を抱いて、助け起こす。

細くて折れそうな肩だ。

軽く頭を振って、ジブリルは口を開く。

「……大丈夫、です。それより、あの子に声を出さないように伝えてください」

「伝えるって、言葉が通じるのか？」

ヴォルフは天使に目を向ける。

「おい、俺の言葉はわかるか？ 声を出すな。お前の声は、俺たちには有害らしい」

半信半疑のまま語りかけると、天使は驚いたように自分の口を塞ぐ。それから何度もカクカクと頷いた。



どうやら、自分の声がこの異変を起こしていることに気づいていなかったようだ。

——ということとは、この天使もここに閉じ込められたばかりなのか？

改めて見ると、天使はふわふわと波打つ金色の髪に紺碧こんぺきの瞳を持っていて、とても愛らしい外見をしていた。人間なら十三歳ほどだろうか。ジブリルより少し幼い程度だ。

天使はキョロキョロとヴォルフの周りに視線をさまよわせる。

ジブリルの声が聞こえているわけではなさそうだが、ヴォルフとの会話からもうひとりここに誰かがいると気づいたのだろう。

ヴォルフは天使を落ち着かせるように、ゆっくりと声をかける。

「俺はヴォルフ。わけあって、お前が入っている鳥籠を回収に来た。お前が何者かは知らないが、できる限り助けるつもりだ」

天使の瞳に、じわりと涙が浮かぶ。

やはり自分からここに入ったわけではないようだ。

それから、天使は鳥籠の床をそつと指でなぞる。その指の動きから、文字を描いているのだとわかった。

「J……U……T……T……A……ユッタ？ お前の名前か？」

天使はコクコクと何度も頷く。

「そうか。ユッタ、必ずここから出してやるから安心しろ」

ヴォルフは自然と笑いかけていた。

この天使——ユツタは翼が生えていても、それ以外はただの少女なのだ。歳もヴォルフの妹と同じくらいで、その面影を重ねてしまったのかもしれない。

ヴォルフの強面こわもてにどれだけの説得力があつたのかはわからないが、ユツタもひとまず安心したように肩の力を抜いた。

それを確かめると、息を喘あえがせていたジブリルが顔を上げる。

「ヴォルフさん、これは天使を捕まえるんじゃないで、天使を作るアーティファクトです」

「作る……？　天使というのは、人工的に生み出すものなのか？」

「厳密には天使ではないと思いますが。これはこの子の声を聴いた人間を操るんですよ。それで屋敷の人間はみんな操られちゃったんですよ」

それから、その名前を口に出すのを恐れるように小さく呼吸を整えた。

「タイトルは——『セイレーンの揺籃ようらん』——そう、刻印されています」

見れば鳥籠の柵には一枚のプレートが嵌はまっています、そこにヴォルフには読めない文字が刻まれている。魔術師が使う文字なのだろう。

「セイレーンって、海の魔物のあれか？」

歌声で船乗りの心を惑わし、船を沈めるといふ伝説の魔物だ。たかが伝説とは思いますが、伝説の舞台になった海域は特に暗礁や潮流が複雑でもないのに海難事故が後を絶たないという。

「そうです。魔術でそのセイレーンを生み出すアーティファクトみたいですね」

「生み出す……とは？」

「人の魂魄こんぱくを抜き取り、鳥籠の中に閉じ込めて魔物に変えるんです。わたしまで影響を受けるような威力ですから、むしろ伝説の方がこれを基に作られたのかもしれないですね。船の上で発動したら、そりゃあ近づいた船は片っ端から沈むことになりませんか」

船が沈んだあとも、天使は助けを求めて歌い続け、そしてそれを聴いた船乗りたちはずるずると引き寄せられて沈んでいったということらしい。

だが、ヴォルフが反応したのはセイレーンの伝説に対してではなかった。

「……ちよつと待て。なら、この子は天使でも魔物でもなく、人間なのか？」

「ええ。たぶん、肖像画の子ですよ……て、ヴォルフさんなにやってるんですかっ？」

ジブリルの言葉を最後まで聞かず、ヴォルフは腰の刀を抜いていた。

小刀、あるいは脇差しと呼ばれる種類の刀剣で、刃渡りは短く、成人男性の前腕部ほどしかない。刀身には炎のように揺らめく刃文はもんが刻まれ、柄には犬の顎を模った鏢つばが嵌められている。

刀は鞘さやから解き放たれると、低く唸うなるように鳴動した。

その唸り声に蝕さくまれるように、刀を握る腕に力が漲みなぎる。

これはアーティファクトの呪まじいだ。この力を使えば、刀など振るわずとも鳥籠の鉄柵くらいはこじ開けられるかもしれない。それほど腕力が込み上げる。

「すぐに出してやる。じつとしていろ」

ヴォルフが刀を振りかぶるとユツタは驚いた顔をするが、すぐに頷いて身を伏せる。怯えて声を出さないでくれたのはありがたかった。

なのだが、ジブリルが腰にしがみついて止めてくる。

「わあああつダメですダメです！ そんなのでこじ開けたらこの子、死んじゃいますって！」

死ぬというひと言に、ヴォルフもギクリと硬直する。

「……それ、本当か？」

「当たり前じゃないですか！ 人の魂を操作するようなアーティファクトがどれだけ繊細な造りだと思ってるんですか？ 誤作動ひとつで中の子なんてぼっくり逝いっちゃいます」

「……なら、どうすればいい？」

ヴォルフが思い留まると、ジブリルもホッと息を吐いて言う。

「もう、なんでもかんでもとりあえず壊そうとするのはヴォルフさんの悪い癖ですよ。どさくさに紛れて壊したらイシユトリアさんにだって怒られちゃうんですから」

「……壊したいのは山々だが、別にそういうつもりではない」

「ヴォルフさんの普段の行いから、その言葉に説得力があると思いますか？」

「……………」

ヴォルフは渋面を浮かべることしかできなかつた。

「とにかく、調べてみた感じじゃ鳥籠を開けるための鍵があるはずです。たぶん、それがセイレーンを操る制御装置にもなってると思います。だから、先に鍵を手に入れてください」

持っているとすればベルリングか、あるいは……。

しかし隠しているとしたら厄介だ。

「鍵はどこにあるのか……」

ヴォルフが呟くと、ユッタがハツとした顔をした。

そしてまた鳥籠の床に指を走らせる。その文字を読み取って、ヴォルフも目を見開いた。

——犯人は、あいつか。

「いい子だ。教えてくれて助かった」

ヴォルフが褒めると、ユッタはなにかをうったえるような眼差しを向けてくる。

——殺さずになんとかしてほしい……ということなんだろうな。

自分をこんなところに閉じ込めた相手を氣遣っているのだ。心の優しい少女だ。

「……できるだけ、おんびん穩便にやってみるさ」

そう告げると、ユッタはぺこりと頭を下げた。

「穩便に……って、ヴォルフさんに一番似合わないセリフですよね」

「ほっとけ」

ジブリルの野次やじに悪態を返して、ふと疑問を抱く。

「ジブリル。魂とやらは長時間抜き出しても平気なものなのか？」

「ダメに決まってるじゃないですか。脳死とはわけが違います。魂の抜けた肉体は生命力を失ってすぐに死んじゃいますよ。……見たところ、まだ生きてはいるみたいですけど、あまり時間はなさそうな感じですかね」

それは、ヴォルフには聞き捨てならない言葉だった。

ユッタの身体もこの屋敷のどこかにあるのだろうか。魂が無事でも、その肉体の方が死んでしまうということらしい。

「いますぐ出してやることはできないのか？ お前なら鍵などなくてもできるはずだろう」

「ええー……」

ジブリルは露骨に嫌そうな顔をする。彼女の言葉通りなら、こじ開けることで中の少女を死なせかねないのだ。無理もないだろう。

「時間が経てば経つだけ危険なんだろう？ 最悪、鍵を持って逃げられることだって考えられるんだ。そもそもこんな不気味な鳥籠の中になど一秒たりとも入っていたいわけがない」

ここで助けなければ手遅れになるかもしれない。

——あんなふうに人が死ぬのは、もうたくさんだ。

脳裏を過ぎるのは、一年前の記憶だった。

ヴォルフが封印美術館を訪れる前の出来事——初めてアーティファクトに触れた過去だ。

腕の中で冷たくなっていく、ひとりの少女がいた。

譲らないヴォルフに、ジブリルも観念したようにため息を漏らす。

「ヴォルフさん、悪人面のわりにはお人好しですよね」

「ほっとけ」

「……でもまあ、ちょっと急いだ方がいいのは事実ですか」

丹念に鳥籠を調べると、ジブリルは小さく頷く。

「うん。たぶん、大丈夫だと思います。この子の身体がどこにあるかはわかりませんが、ここから出してあげれば勝手に身体に戻るはずですよ」

確かにここから出しても、そのまま消えてしまうのでは意味がない。

そう言うと、ジブリルは目を閉じて静かに唇を震わせる。

『我は虚構の代弁者。神を目指して魔に墮つ者なり。叡智の器よ、汝の真実を明らかにせよ』

詠うように朗々と綴られる言葉に、ジブリルの身体が淡い光に包まれる。

ジブリルの瞳と同じ、淡い董色の光だ。

その光は文字でできていた。少女の身体から地へと伝い落ちると、幾重もの帯を作って精緻な円環と図形を紡いでいく。

それは魔術と呼ばれる力だった。

かつてアーティファクトという強大な災厄を生み出し、そしていまではそのほとんどが失われてしまった叡智の結晶だ。

地下室を埋め尽くすほどの光は『セイレーンの揺籃』をも呑み込んでいく。

光は柵へと登り、内側へと侵蝕しんしょくしていた。

ジブリルの姿は見えずとも、魔術の光は見えているのだろう。ユッタは声を出しそうなのを堪えるように、必死で自分の口を押さえる。

「ヴォルフさん、『吼犬』を鍵穴に挿してください。そーっとですよ？」

「ああ」

ヴォルフは刀を真まっ直すぐ構かまえると、その切っ先を鳥籠の鍵穴に挿し込む。直接刃を当てないよう、ギリギリのところまで止めて。

途端に、鍵穴から重色の光があふれる。

「——っ」

ヴォルフは目を見開くが、手に握った刀はピクリとも震えなかった。

その光に、ジブリルが手を挿し込む。

光の奔流は指の隙間を縫うようにして乱れ、幾筋もの糸のように束ねられていく。じっと見つめるとこれも文字の羅列でできていて、しかも一本一本が異なる文章で描かれていた。

その光景にユッタも目を見開いて息を呑む。

魔導書というものが存在するなら、この光の糸一本一本が一冊の書物なのだろう。だとすれば揺籃からあふれる光の渦は、もはや巨大な書架しょかともいえるかもしれない。

ジブリルの額に汗あせが滲にじむ。



「ものに触れなくても、魔力の操作はできるんですよね」

強がるように呟くと、ジブリルは光の糸を一本ずつ引きちぎり、あるいは編み込み、あるいは結びつけていく。

彼女は気の遠くなるような情報量の糸ひとつひとつの意味を読み分け、操っている。ひとつの書架でタイトルのない書物を選別するような作業だ。

これはジブリルが魔術師だから、というだけで説明できる現象ではない。彼女自身の類い希な才能と、血の滲むような研鑽けんさんによって手に入れられた力ちからだ。

やがて鍵穴からこぼれる光の糸は、宙を漂う二本を残すだけになっていた。

「さて、このどちらかを切れば揺籃ゆらんが開くんですよけどね……」

「なにか問題が？」

「どっちを切ったらいいかわからないようにできてるんです。……わたし、こういうときって絶望的に運が悪いんですよね」

戯おどけるように言うが、ジブリルの顔には余裕がなかった。

そこでふと思いついたようにヴォルフを振り返る。

「ヴォルフさんはどっちが正解だと思います？ 右と、左と」

——そこで俺に振るのか。

そんな責任重大な選択をいきなり投げられ、ヴォルフは洪面こうめんを浮かべた。

「では、左だ」

それでも、ヴォルフはすぐに答えた。

「その根拠は？」

「ただのカンだ。間違っていたら気がすむまで恨め」

ジブリルは目を丸くする。

それから小さく笑ってヴォルフが示した糸に手を伸ばす。

「——じゃあ、右にします」

突然手の向きを変えて、ジブリルは右を切った。

「お前ッ」

なぜこういうときまでこの少女はあまのじゃくなのだろう。

しかし、鳥籠からカチリと音がした。

「——ッ、開いた！」

柵の扉がゆっくりと開き、ユッタはパッと表情を明るくする。そして、そのままスウツと消えていった。どうやら元の身体に戻れたようだ。

「助かった。礼を言う」

このときばかりはヴォルフも素直に感謝を口にしたのだが……。

「すみません、やっぱりダメでした」

「ナベリウス封印美術館の蒐集士」<sup>コレクタ</sup> 試読版第二弾は「ここまで」。

試読版第三弾も近日中に公開の予定です。乞うご期待!!

GAノベル初のミステリアス伝奇「ナベリウス封印美術館の蒐集士」<sup>コレクタ</sup> は2017年1月15日  
発売予定です。